

おやまごぼう

2026. **4**月

第 502 号

発行所 真宗大谷派金沢別院
 代表者 高乗 敬和
 〒920-0854
 金沢市安江町15番52号
 TEL (076)261-6432
 FAX (076)265-6122
 年間購読料 1,200円(送料込)

VOICE
共に生きる

広報委員レポート

東日本大震災から15年 — 街は復興したのか —



金沢教区広報委員会の「東日本大震災15年 取材研修会」は3月10日から12日にかけて開催された。

3月10日は、名取市震災復興伝承館や閉上中学校慰霊碑、震災遺構の仙台市立荒浜小学校、そして東北教務所を訪問した。翌11日には、東日本大震災遺構 伝承館、本稱寺「勿忘の鐘」(陸前高田市)、東日本大震災津波伝承館を見学した。最終日の12日には、南三陸町防災庁舎跡、石巻市震災遺構大川小学校を訪問した。

2011年3月11日(金曜日)14時46分に発生した「東日本大震災」。マグニチュード9.0、最大震度7、日本国内観測史上最大規模の巨大地震と津波は壊滅的な被害をもたらした。そして巨大津波を起因とした福島第一原発事故。震災の3年後、金沢教区広報委員会は現地へ赴き取材報告をした『おやまごぼう』紙358号参照)。それから12年。そして震災から

15年。その間にも多くの自然災害に見舞われている。特に2024年元日に発生した能登半島地震は、教区内はもとより能登地区に甚大な被害をもたらしている。

東日本大震災から15年が経ち震災を知らない子どもたちもいる。この年月を通して「何が変わり、何が変わらないのか」。再び現地に足を運び直接声を聞き、震災後の今を目の当たりにしてきた。



閑上の記憶の語り部の長沼俊幸さんから説明を聞く(閑上中学校慰霊碑前)

再び訪れた名取市閑上地区。震災から15年という時間は「行政復興のエキスパート」と呼ばれている。土地はかさ上げされ、高い防潮堤が築かれた新市街地には、新しく移ってきた多くの若い世代が住居を構えていた。しかし約5000人の閑上の住人は1000人も戻ってはいないという。災害危険区域に指定

されたもともと住んでいた場所には居住出来ず、戻りたくても戻れない人がいる。当時の記憶から、今も尚この閑上に立ち入る事の出来ない人がいる。復興のエキスパートと言われる閑上、街は整えられても「何をもって復興なんだろう?」という語り部の声が残る。

これからの話をしていこうという語り部。震災後の教訓が活かされていない災害現場の状況。変わらない仮設住宅の問題や避難所の課題。災害が起こるたび毎回更新されない教訓が多い。振り返りをしない行政。古い法律に縛られる行政。余計なことはしない行政の問題。それでも知らせていく、伝え続けていく。他の誰でもない「私の事」として知ってもらう為に伝え続けていく。それは自然災害そのものが人間の想定を簡単に超えていくものを知った経験から、多くの人のいのちを守る為に今も語り続ける閑上がここにあった。

(谷涼雅広報委員)

3月11日、気仙沼市「東日本大震災遺構・伝承館」を訪れた。当時の津波被害の様子を伝える写真や映像を見学し、震災の状況を学んだ。また震災遺構として、津波が4階まで到達した気仙沼向洋高校の旧校舎内部を見学した。15年が経過した現在でも、校舎は当時の姿をとどめたまま保存されている。今後どこに起こるか分からない震災を、一人でも多くの方に「目に見える証」として伝承し、将来に警鐘を鳴らしている。

今回語り部としてお話をしてくださったのは、震災伝承ネットワーク気仙沼スタッフの三浦秋男さん。三浦さんは、震災当日の津波がどのように気仙沼向洋高校周辺地域に被害をもたらした、また旧校舎にどのような被害が及んだのかについて、現場を見ながら丁寧に説



津波によって気仙沼向洋高校(旧校舎)3階に運ばれてきた車(震災遺構)

明された。旧校舎内の各階は津波が押し寄せ、教室が破壊されたままの状態になっている。そして3階には流されてきた車がそのままの状態で見つかり、さらに4階には下の部分が見えなくなった。これは津波が約12メートルの高さまで到達したことを示している。震災から15年という月日が流れ、街からは徐々に震災の爪痕が消えていく中で、この場所は今もなお津波の威力とその恐ろしさを静かに語り続けている。

あの日、あの美しい海。海の恵みを頂きながら共存しているこの場所に、津波という自然災害は、人々には想像を絶する出来事であったであろう。津波が目の前まで迫る中で、必死に生きようとした数多くの人たち。当時のことを思うと、津波はどれだけ人々に恐怖を与えて、何もかも奪っていったのか。自然災害は私たちの想像をはるかに超える。その一方でこの東日本大震災遺構・伝承館には、また震災にみまわれても、一人でも多くの人を助けたという強い願いが込められていた。

(廣瀬仁広報委員)

金沢教報

共学研修会

「是旃陀羅問題」を通して 見えてきた私の相

今年度の教区共学研修会は「是旃陀羅問題」をテーマに、大窪康充氏（白山市浄土寺住職）を講師に迎え四回にわたり開催された。本会は学習テキスト『御同朋を生きる』の輪読、講義、班別座談、全体発表、まとめの講義という日程で行われた。この学びは参加した各自の課題を明確にし、次なる歩みへの有意義な導きとなった。



講義の様子

を強調した。その指摘は私にとつて、是旃陀羅問題を考える際、「念仏申す」という一点を忘れていないかという、わが身に響く教えであった。すなわち「南無阿弥陀仏」、この本願の勅命を真つ先に聞かなければならぬものは誰なのか。それはあなた自身ではないかと、まさに仏が私を教え導こうとしているのである。

では仏は人間の何を問題にされているのか。そこに見えてきたのは、この問題を自分には関係のないことと決めつけていた、無関心という私の「邪見」であった。さらには、そもそも経典を「仏説」として仰いでいたのかという、私自身の姿勢そのものが根本から問われていたのである。

私は、最も大事な問題をいかにおろそかにしてきたか。今回の研修会は、その事実直に直面させられる尊い機会となった。この学びを今後皆様とともに、語り合うことよって、さらに深めていきたいと願っている。

細川公英（第七組 順教寺）

男女共同参画推進小委員会 「制度変革が人を変える」

さる2月20日、講師に三重教区の中川和子氏（真宗大谷派宗議会議員）を招き、研修会が開催され

ました。

社会や組織を動かすには、制度や「しくみ」から変えることの重要性。人の意識変容には時間と痛みが伴うため、強制力を持った仕組みから着手することが変革への近道だと学びました。

多様な価値観が混在する社会において、中川氏が「痛みを感じている人がいる場所を、自らの行動で変えていく」という姿勢を貫かれていくことに、深い敬意を抱かずにはいられません。特に、部落問題に尽力しながら「男女の問題までは手が回らない」と語る人がいるという指摘には、大きな衝撃を受けました。

私たちは無意識のうちに問題を分別し、「自分の管轄外」と決めて目を背けています。私自身も例外ではなく、自らの無知や無関心によって見過ごしてきた人びとの苦悩があることに気づかされました。真宗の教えに触れる者として、この「気づき」は尊いもの



講師の中川和子氏

のです。他者の痛みを分かち合い、我が事として生きる人が増えれば、個人も地域も、そして世界も変わっていくに違いありません。

今回の講演は、私たちに「まず何を变えるべきか」を問いかけているのではないのでしょうか。痛みを抱える人がいる現実から目を逸らさず、制度や「しくみ」を整える努力が求められているのだと受け止めました。

牧田静江（第十一組 浄福寺）

金沢真宗学院 「三帰依文」をテーマに、 一泊研修会 開催

さる2月14・15日に、金沢真宗会館において「一泊研修会」が開催され、講師の黒萩昌氏（北海道教区 法誓寺）は「三帰依文・帰依三宝について」と題して講義されました。

まず、氏は「三帰依文とは、仏法僧を唯一の拠りどころとする身となり、他の一切のものをたのみとしません、という表白です。そこに先立って如来の召喚があるのです。その声を聞き取り、仏法を聞かせてもらうのです」と述べ、これまで聴聞の場で慣例的に唱和していた三帰依文の意味を問うことから始まりました。私は何を拠りどころとしているのかと問うものであり、私に向けられた喚び声なのだと思わされま

した。

また、三帰依が成り立つところに仏法がひびいてきて聞かずにはいられないということ、光明・名号のはたらきによって一瞬一瞬自分自身の姿が知らされる、そんな念仏申す生活について、丁寧に話していただき、そして「この身をそのままに喜び感謝していく道と、一緒に聞いて歩いて歩んでいく道と、それが教師としての使命です」と述べました。

講義を受けての座談会では、学年の枠を超えたメンバーが顔を合わせ、聞いて感じたことを確認し、話し合う貴重な時間をいただきました。短い日程ではありましたが、そこに開かれているサンガを実感できたこと、その場に身を置くことができたことで、充実した研修会となりました。

藤認まり子（真宗学院2年生）



一泊研修会の講義の様子